

令和 5 年 4 月 14 日

(※受付番号)

教 育 長 様

研究コース
B グループ研究B
校園コード（代表者校園の市費コード）
741702

代表者 校園名： 大阪市立矢田北小学校
 校園長名： 清水 健司
 電 話： 06-6705-1601
 事務職員名： 東 将武
 申請者 校園名： 大阪市立矢田北小学校
 職名・名前： 首席 川口 祐太朗
 電 話： 06-6705-1601

令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	継続研究（3年目）
2	研究テーマ	確かな学力を身に付けるための指導・支援方法を探る —子どもの特性を知るアセスメントと環境整備を通して—			
3	研究目的	テーマに合致した目的を項立てて記載してください。 1、児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求 2、環境整備UD化の追究 3、同一進学校下の学校で連携し、児童・生徒の課題に対する協同的支援の実施 4、専門的な講師による研修会や講演会への参加を通じた、教員の専門的知識と自己研鑽の意欲の向上			
4	研究内容	(1)研究内容の詳細 ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する 学校現場において、個々の特性に応じた支援を必要とする児童・生徒が増えてきているという実感がある。近年では、ゲーム障害などの新しい障害の診断もされるようになり、今後も社会環境により配慮を要する児童・生徒が増加していくことが予想される。矢田中学校区においても同様で発達の課題のある子どもたちが多く、ASD、ADHD、DCD (LD)、愛着障害など多岐にわたると思われる。教員の意識改革とともに個に応じたエビデンスベースの対応が求められると考える。一方、境界知能の児童は見落とされやすく、支援が行き届かない場合が多い。適切な指導支援がない場合、思春期や成人期に問題行動や反社会的な行動をとる可能性が高いと疫学統計学により証明されている。そのため、どの児童においても適切な学習環境のもと適切な支援が必要である。個人の要因であるのか、それとも学校、家庭の要因によるものかなどのアセスメントとすることが大切である。そこで、本研究では次の4点について重点的に研究を進める。 ① 児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求 ② 環境整備UD化の追究 ③ 運動面での不器用さを緩和したり、姿勢保持をしたりするための体づくり ④ 教員の研究会・研修会参加を通じた専門的知識と自己研鑽の意欲の向上 学力向上を支える上でも、認知機能を高めるコグトレーニングや視機能を高めるビジョントレーニングなどの体づくりなどを通じて、脳機能に対してアプローチを行う。さらに、教室や学校環境のUD化を行い、児童・生徒が安心して過ごせるようにする。また、現行の校内で行われている集団育成などに関わる実践交流会などでは、問題行動を起こした児童・生徒に対しての対処療法について話し合う場が多いが、それではリスクマネジメントは不十分であるといえる。日々、子どもたちと関わるうえで、多くの専門的な視点をもちアセスメントを行うことで、適切な教育ができるといえる。そのため、専門的な知識を得るために、大学教員や講師を招聘し研修会を実施する。教員が専門的な知識を獲得することにより、学ぶことの大切さを実感するだけでなく、視野を広げて児童・生徒と向き合い柔軟な対応ができるようになると考えられる。矢田中学校区で抱える課題を改善し、地域の児童・生徒、また、かかわる教職員にとって有用となる研究や研修会を実施していきたい。			
		(2)継続研究〔2年目〕 ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する 学校現場において、個々の特性に応じた支援を必要とする児童・生徒が増えてきているという実感がある。近年では、ゲーム障害などの新しい障害の診断もされるようになり、今後も社会環境により配慮を要する児童・生徒が増加していくことが予想される。矢田中学校区においても同様で発達の課題のある子どもたちが多く、ASD、ADHD、DCD (LD)、愛着障害など多岐にわたると思われる。教員の意識改革とともに個に応じたエビデンスベースの対応が求められると考える。一方、境界知能の児童は見落とされやすく、支援が行き届かない場合が多い。適切な指導支援がない場合、思春期や成人期に問題行動や反社会的な行動をとる可能性が高いと疫学統			
		(3)継続研究〔3年目〕			

「特別支援学級及び在籍児童・生徒数の推移」の資料には少子化傾向にあるにも関わらず年々特別支援学級在籍者数が増加傾向であること（文部科学省、2021）、通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果では学習面または行動面に著しい困難さがある児童の割合が8.8%（文部科学省、2022）であげられている。研究協力校でも、1年目の研究前より、個々の特性に応じた支援を必要とする児童・生徒が増えてきたという実感がある。1年目の研究では、コグトレやグッドイナフ、MIMなどの取り組みと愛着障害やHyper-QUなど研修を行った。2年目には、PBS（ポジティブ行動支援）について理解を深めてきた。3年目においては、これまでの研究と絡めながら、学校のきまりやUD（ユニバーサルデザイン）、SWPBS（スクールワイドポジティブ行動支援）など、クラスの取り組みだけでなく、学校全体としての取り組みを進める。さらには矢田中校区3校での連携をはかり進めていき地域の課題を一緒に解決していくような、教職員集団をつくっていきたい。

本研究では次の4点について重点的に研究を進めるとともに、昨年度、大阪教育大学 庭山 和貴准教授に教えていただいた、学校規模ポジティブ行動支援についても、していきたい。

- ① 児童・生徒へのアセスメントからそれぞれの発達にあった支援方法の探求
- ② 環境整備UD化の追究
- ③ 運動面での不器用さを緩和したり、姿勢保持をしたりするための体づくり
- ④ 教員の研究会・研修会参加を通した専門的知識と自己研鑽の意欲の向上

また、今年度は、職員研修の充実をはかり専門的な知識を得るために、大学教員や講師を招聘し研修会を昨年度よりも多く実施する。

		日程や内容など、研究の過程がわかるように詳細に記載してください。
5	活動計画	<p>4月 【研究企画会・推進委員会】 本校 校内委員会「がんばる先生推進委員会」研究の進め方、見込まれる成果等について検討する。 【3校 担当者会】 研究の進め方、見込まれる成果等について検討する。 ・昨年度までの成果と課題をふまえ、研究内容の焦点化を図る。 ・先行研究をもとに年間計画を立案する。 ・児童アンケート、教員アンケートを作成する。</p> <p>5月 【各校での全体共有】 年間計画の共通理解を図る。 児童アンケート・教員アンケートの実施・分析</p> <p>6月 教員研修プログラムの作成 児童アセスメントの実施(アンケート・Hyper-QU) 研修会(オンライン後、内容の周知及び研究内容の活用) 各校への大学教授の視察・児童の課題の把握・研修会</p> <p>7月 第1回 連携校研修会 今後の計画 研修会(オンライン後、内容の周知及び研究内容の活用)</p> <p>8月 研修内容を踏まえた研究経過の分析と今後の取り組みの検討</p> <p>10月 PBS研修</p> <p>12月 研究結果の分析・研究成果のまとめ 【がんばる先生支援 研究発表会】 公開授業・研究協議 指導助言 大阪教育大学教授 庭山 和貴</p> <p>1月 第2回 連携校研修会・研究発表会(参加者アンケート)</p> <p>2月 教員・児童への事後アンケート実施</p> <p>5月～3月 連携校協議会は毎月実施</p>
	月	<p>11月 アジアパシフィックPBS国際大会参加 Hyper-QU実施後研修会 講師：大阪教育大学 水野治久教授 年2回 授業研究会の指導助言 講師：大阪教育大学 庭山 和貴 准教授 年4回実施</p>
6	見込まれる成果とその検証方法	<p>(1)継続研究（2年目、3年目）において検証方法の変更の有無を記入してください。</p> <p><input type="checkbox"/> 変更しない。 理由 3校で経過観察することで、成果をはかる。そこに追加する形で、研究を進めていく。</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 変更する。</p> <p>(2)大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上」および、「教員の資質や指導力の向上」について見込まれる成果を端的に記載し、その成果について客観的な指標により、必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。（いざれかに☑を入れてください）</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>○認知機能や視機能を向上させるトレーニングに関する研究を進めることにより、児童・生徒の「対人スキルの獲得」や「書く力」・「読む力」・「運動能力」などを育成する。</p> <p>《検証方法》 3校の抽出学級の児童を対象としたアンケートの「人とうまくコミュニケーションをとることができますか」の質問項目において実践前後で比較し3ポイント上昇させる。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</p> <p><input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>○認知機能や視機能を向上させるトレーニングに関する研究を進めることにより、児童の「対人スキルの獲得」や「書く力」・「読む力」・「運動能力」などを育成し子どもの自信につなげる。</p> <p>《検証方法》 3校の抽出学級の児童・生徒を対象とした視写テストにおいて速度と正確性を実施前より上昇させる。</p>

6	見込まれる成果とその検証方法	<p>【見込まれる成果3】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>○不器用さを改善させるための教室・学校環境づくりを進め、さらにUD化を進める。それらの取り組みが、児童・生徒のボディイメージを高める結果につなげる。</p> <p>『検証方法』 体の発達、特に腕や手指の運動能力と関係が深い描画検査グッディナフ人物画知能検査や運動能力を計る検査において実施前後で比較し平均値を3ポイント上げる。</p> <p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上</p> <p>○教員の研究会・研修会参加を通して発達に対して専門的な知識を身に付けることができる。</p> <p>『検証方法』 教員へのアンケートを実施し「研修会に参加して役に立った」の肯定的回答を80%以上にする。</p>						
7	研究成果の共有方法	<p>◆研究発表【必須】 報告書提出日（令和6年2月22日）までに必ず行ってください。</p> <p>○研究発表の日程・場所（予定）</p> <table border="1" data-bbox="446 1084 1569 1160"> <tr> <td>日程</td><td>令和 5 年 12 月 6 日</td><td>場所</td><td>矢田北小学校</td></tr> </table> <p>◆waku^{x2}.com-bee掲載による共有【必須】</p> <p>○掲載の日程（予定）</p> <table border="1" data-bbox="446 1261 1070 1337"> <tr> <td>日程</td><td>令和 5 年 11 月 1 日</td></tr> </table> <p>◆他の共有方法を計画している場合は記載してください。</p>	日程	令和 5 年 12 月 6 日	場所	矢田北小学校	日程	令和 5 年 11 月 1 日
日程	令和 5 年 12 月 6 日	場所	矢田北小学校					
日程	令和 5 年 11 月 1 日							
8	代表校園長のコメント	<p>1. 新規研究（1年目） ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する 今回の研究テーマは、本校独自で取り組むよりも矢田中学校下の2小1中で取り組むことにより、小中一貫した9年間のつながりで児童・生徒の自己有用感を高めることができる有効な手立てである。 また、3校合同の連携研修会や各種の研究大会に参加することで教員個々の専門的な知識が深まり、専門的知識に裏付けされた児童・生徒理解が共有できると考える。また、連携研修会を通して3校の教員同士の交流が深まり、小小連携、小中連携が従来の形式的な連携だけではなく、より実質的な連携がなされ、児童・生徒・保護者への個別の対応について今まで以上にきめ細やかな配慮ができると考える。 この研究を通して、教員一人一人の指導力が向上し、児童・生徒理解が深まることを期待する。</p> <p>2. 継続研究（2年目） ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する 今回の研究テーマは、本校独自で取り組むよりも矢田中学校下の2小1中で取り組むことにより、小中一貫した9年間のつながりで児童・生徒の自己有用感を高めることができる有効な手立てである。 また、3校合同の連携研修会や各種の研究大会に参加することで教員個々の専門的な知識が深まり、専門的知識に裏付けされた児童・生徒理解が共有できると考える。また、連携研修会を通して3校の教員同士の交流が深まり、小小連携、小中連携が今まで以上に深まり、より実質的となり、児童・生徒・保護者への個別の対応について、今まで以上にきめ細やかな配慮ができると考える。また、2年目の研究であるため、追跡調査を実施し、より児童・生徒にとって有効な支援について、研究が進むと考える。 この研究を通して、教員一人一人の指導力が向上し、児童・生徒理解が深まることを期待する。</p> <p>3. 継続研究（3年目） 2年間の研究を終え、児童の追跡調査の中で、子どもたちが自分の良さを認められてると感じる場面が多くなってきた。また、小中のスムーズな引継ぎにより、中学校での生活にも徐々によい影響がでてきていると感じる。 校内研修を通して、自校の子どもたちの課題や良いところに目を向け、教職員が一致して同じベクトルで、今年度の取り組むべき方向性も確認できた。教職員の行動マトリクスも作成し、矢田中校区でのモデルを完成させたい。 今後のまとめとして2小1中での9年間のモデルにつなげていきたいと考えている。義務教育9年間を同じ指導法で見守っていくことで、地域の課題解決に繋がっていくことを切に願う。</p>						